

巻頭言

研究会の力

來村 徳信

(大阪大学産業科学研究所)



昨年(2012年)11月15日から17日の3日間、合同研究会2012を開催した。これは11研究会を集中的に開催し、合同でパネルディスカッションなどを行うという企画であり、延べ約460名ものご参加をいただいた。今年度の全国大会の参加者数は823名であるから、延べ人数で重複があるとはいえ、約半分の規模になったことになる。ご参加いただいた方々に、この場をお借りして厚く御礼申し上げたい。この企画は、昨年度、学会創立25周年記念として山本章博先生(京都大学)を中心として復活されたものであり、今年度は研究会主担当理事として筆者が、担当理事の山田誠二先生(国立情報学研究所)や山本先生、学会事務局、さらには山口高平会長のご協力を得ながら、全体の運営を担当した。さらに、参加各研究会の合同研究会実行委員や主査・幹事の皆様のご尽力があって、記念行事であった昨年度を超える参加者数の盛会になったものであり、運営に携わっていただいた皆様にも深くお礼を申し上げる次第である。

さて、本学会には現在第1種から第3種に区別される17の研究会がある。第1種の4研究会は、学会初期に設立され登録会員制度によって運営されている。第2・3種研究会は、1990年代以降に学際的なトレンドの研究分野を対象として設立されたものであり、独立採算制で自主的な運営がなされている。本合同研究会は、もともと栗原聡先生(大阪大学)のご発案により、会場の確保と会場費の捻出をまとめて行うことにより第2・3種研究会の運営を援助するという現実的な目的がきっかけとなって企画されたものであるが、2回の開催やパネルディスカッションを通して、各研究会のもつさまざまな「力」とそれを集中的に開催する合同研究会がもち得る「力」が見えてきたように思う。

まず、ホットトピックを扱う「先進力」と「推進力」である。今回のパネルディスカッションでは、ビックデータと機械学習・シミュレーション、社会性、実践的行為の科学、現場コミュニケーションなどがキーワードとしてあがっていた。このようなトピックの議論の場を提供し、研究を推進するとともに、社会へ貢献する原動力となっている。

次に、「コミュニティ力」である。各研究会は、トピック・手法・対象領域などに基づいたコミュニティが、学会によってオーソライズされ具体化されたものであり、先進的研究を概念化したものとして、関連研究者と聴講者の「求心力」を生み出す。同時に、研究の場の「運営力」を創出し、次世代へ継承していく場となる。いくつかの研究会は全国大会のオーガナイズドセッションや近未来チャレンジセッションを母体としており、それが研究会となり、次は学会誌・論文誌の解説や論文特集の企画主体となり、さらには国際会議などの運営母体へと発展し、いくつかは昨年度末の進化計算フロンティア研究会のように学会へと発展的解消される、といったようにコミュニティの基盤となっている。

さらに、研究コミュニティの「接続力」とコミュニティ外からの「引込力」も重要である。合同研究会の学術的な狙いは各研究会の接続力を高め、相互の交流を生み出し、アクティビティをさらに向上させることにある。今年度も2研究会が連携開催されたが、さらなる連携が望まれる。さらに、合同研究会は東京近辺の開催であることもあり、非会員も含め、普段は参加していない研究会などに気軽に参加していただいて、コミュニティを広げる「引込力」を発揮することが望まれる。実際、今回の合同研究会で複数の研究会に参加する方にご購入いただいた合同資料集の購入者73名のうち、23名が学会非会員であったことは、ある程度それが達成されつつあることを示唆している。また、全国大会と比較すると、発表数に対する聴講者数の比が高いことも特徴である。なお、このような研究会の「接続力」と「引込力」は、通常開催の研究会においても、非会員や研究者ではない現場の方々の参加が多い研究会など、十分に発揮されている。また、他学会の研究会などのコミュニティとの接点として、共催・連続開催などが盛んに行われている。

これらの「力」を増強する本学会の研究会活動の特徴が「多様性」であると思われる。第2・3種研究会を申請(と承認)により設立し、自主的に運営できることから、トピックスや参加者の立場もさまざまである。今回のパネルディスカッションでは、研究者を中心とした研究指向なのか現場の実践者を中心とした現場指向なのか、対象領域指向なのか手法指向なのか、科学指向なのか工学指向なのか、といった違いが顕在化していた。また、第1種研究会も中心となるトピックが時とともに変遷している。このような多様性とダイナミクスこそが研究会の「先進力」と「推進力」を生み出し、「コミュニティ力」を高め、ほかとの接点となって「接続力」と「引込力」を生み出すと考えられる。

さらにいえば、これらは研究会活動に限ったことではなく、人工知能という研究分野の本質的特性の現れとして追求していくべきことであると思われる。理事会、学会誌、論文誌、全国大会などでも議論・実践されている。今後の研究会活動がそれらとも連携しつつ、人工知能学会のアクティビティの向上にさらに貢献することを望みたい。